



### CONTENTS

NIHONGO-KYŌIKU TSŪSHIN No.55/MAY 2006

- 表紙・特集 ..... 1  
**「日本語教育スタンダード」とは？**  
日本語事業部企画調整課長 嘉数 勝美
- 日本語の教え方イロハ 第1回 ..... 4  
**日本語教師の役割、コースデザインについて考える**
- 授業のヒント ..... 6  
**外国語学習に文化理解を取り込む2**
- 新聞・雑誌から見る現代日本 第23回 ..... 8  
**18年間の単身赴任**
- 本ばこ（新刊教材・図書紹介） ..... 11
- 文法を楽しく!! 第5回 ..... 14  
**「は」と「が」（2）**
- KC（関西国際センター）研修生の  
Nippon レポート 第5回 ..... 16  
**日本人は時間に厳しいですか**

※本誌で、ルビが文字の下に付いているのは、紙や物差しなどでルビを隠して、漢字の読みの練習ができるようにするためです。

### On the Web

[http://www.jpj.go.jp/j/japan\\_j/publish/tsushin/index.html](http://www.jpj.go.jp/j/japan_j/publish/tsushin/index.html)

以下の記事は JF のウェブサイトのみにてご覧になれます。

- 日本語・日本語教育を研究する 第29回  
**日本語教育でことばと文化をどう考えるか**  
早稲田大学大学院日本語教育研究科教授 細川英雄
- 授業に役立つホームページ 第14回  
**昔話を楽しもう**
- 海外日本語教育レポート 第12回  
**アイルランドにおけるヨーロッパ言語ポートフォリオ (European Language Portfolio:ELP) の日本語学習への活用例**  
小木曾 左枝子 (アイルランド大学ダブリン校 応用言語センター非常勤日本語講師)
- にほんごハローワーク 第5回  
**お客様の夢をもっと膨らませてあげたい**  
柳 智恵 (ユジヘ) さん  
ヤマハリビングテック株式会社 コーディネーター (出身:韓国)

### アンケートのお願い

今号も『日本語教育通信』継続送付に関するアンケートを同封しています。前回ご回答いただけていない方は、必ずこのアンケートに記入して返送するか、あるいは以下のアドレスから回答してください。ご協力をお願いします。

[http://www.jpj.go.jp/j/japan\\_j/publish/tsushin/index.html](http://www.jpj.go.jp/j/japan_j/publish/tsushin/index.html)

## 「日本語教育スタンダード」とは？

にほんごきょういく

国際交流基金日本語事業部 企画調整課長 嘉数勝美  
こくさいこうりゅうききん にほんごじぎょうぶ 企画調整課長 嘉数勝美

国際交流基金は、「日本語教育スタンダード」の構築をめざして、2005年度に日本で3回の国際ラウンドテーブルを開催し、国内外の日本語教育、言語、及び言語政策専門家とともに検討を続けています。この記事では、海外で日本語教育に携わるみなさんに、この「日本語教育スタンダード」についてお伝えします。



3月25日に東京で行われた第3回ラウンドテーブル（公開シンポジウム）には340名余りの参加がありました。

日本語教育に携わっているみなさんがこのことばを耳にしたとき、いったい何を連想するのでしょうか。また、もしもこれが「スタンダード日本語」という語順になったらどうでしょうか。後のそれは、たとえば言えば「標準語」や「共通語」がもつ意味や役割に近いものです。しかし、話題の「日本語教育スタンダード」、つまり国際交流基金がいま取り組んでいるのは、日本語を学ぶ人や教える人が、どのような過程（プロセス）を経てそれぞれの目標（ゴール）に達するのか、導くのかという「標準的」「体系的」な方法論を整備しようということなのです。ですから、標準的なアクセントやイントネーションが固定されたり、また語彙や漢字の数が制限された日本語を公に決めたりしようということではありません。

### 1. 現在の日本語教育方法論の問題点

もちろん、外国語の教育は今にはじまったわけではなく、ずいぶん昔から行われていて、それぞれの時代の要請に応じて、いろいろな方法論が考えられ、また教材も工夫されてきました。たとえば、学習段階については、「入門」や、「初級」、「中級」、「上級」という分け方があります。しかし、それぞれの分け方は、必ずしも一定不変ではなく、また合理的でもないことを、実はみなさんが一番よく知っているとします。分かっているようで分からないのは、「入門」と「初級」との違いですし、それぞれの「級

の間の境界線がどこであるのか、いつもみなさんを悩ませているはずです。

「日本語能力試験」で使われている「1級」から「4級」までの「級」も、見方によれば、上記の「初級」、「中級」、「上級」という考え方と似ていて、「級」別に平均学習時間や、習得した文字（主に漢字）の数などを、ある程度の標準としています。その意味では、「初級」⇒「中級」⇒「上級」というおおざっぱで感覚的な分類よりは、よほどしっかりできています。しかし、それでもなお、下の「級」から上の「級」への移行になめらかな連続性がないという指摘もあるのです。また、教授法については、伝統的な「文法・訳読教授法（Grammar Translation Method）」から、より実践的な「自然教授法（Natural Approach）」や「直接教授法（Direct Method）」が生まれ、そしてコミュニケーション能力を重視した「コミュニケーション言語教授法（Communicative Approach）」などさまざまな方法論が考え出されてきました。一つひとつは、それぞれの特長をもっていますが、しかしこれらの教授法が学習段階別の指導や達成目標と合理的に組み合わせられてきたとは必ずしも言えないのです。

特に、外国語としての日本語教育は、英語やフランス語などと比べればその歴史も経験も浅く、多くの専門家や関係者が懸命にいろいろな工夫をしてきたのですが、海外での学習者が急激に増え、その年齢層や、学習動機や目標が多様化するに伴って、「だれが」、「どこで」、「どんな」対象に当たっても、それぞれのゴール（目標）にうまく導くための理論的で体系的な方法論が不十分であることに気がついたのです。ここで言う不十分とは、一つひとつに問題や課題があるということではありません。対象や範囲の限られた個々の教育現場では、それでも一定の成果を挙げているということはありますが、それぞれの結びつきに一定の方針や方向性が見られず、また学習成果を測定・評価する手法もまだ十分に整備されていないということです。

## 2. 日本語教育の国際性

しかし、さまざまな国や地域の、さまざまな学校教

育制度の中での日本語教育の基盤づくりを支援することを目的とする基金にとって、そのような問題や課題をそのままにしておくことは、望ましいとは言えません。基金による日本語教育事業は、設立以来一貫して一つひとつの要望や実情に応じて行われてきましたが、先にも述べたとおり、日本語教育の急速な国際的な広がりと多様化を目の当たりにして、もはや今までのような方法論では、めまぐるしい変化に追いつけないのではないかと、「気づき」がありました。また、この国際的な状況から、文字どおり、国の違いや学習環境の違いを超えて、日本語の教育や学習を通じてお互いに通じるところや、影響し合うところがあることも知られてきて、日本語そのものに国際性があるのかという議論よりも、日本語教育そのものの国際性が「熱い話題」となってきたのです。

言語教育の国際性という、国内や地域での多言語化が明らかなアメリカやオーストラリア、そしてヨーロッパでの取組みに注目すべき動きがあることに、おそらくみなさんも思い当たるでしょう。アメリカやオーストラリアでのそれは、一つの国の中で、ヨーロッパでのそれは、言語の異なる国々による共同体という枠組みの中で、複数の言語教育の間で共有する「共通」の方法論を持つということなのです。この考え方もっとも重要なことは、特定の言語に特別な地位や権威を与えないということですが、まさにその具体化として、学習法や指導法、到達目標（成果）の評価や認定に「共通枠」を設定することが実現されたのです。日本語教育の国際性の強化についても、これを参考にしつつ、またこれまでの蓄積を活かして新しい方法論の工夫ができるのではないかと考えました。

## 3. 本格的な検討の開始—ラウンドテーブル—

その本格的な検討のためには、まずそれらの現状や実態を知り、日本語教育への応用ができるのかどうかを見極めることが必要不可欠ですから、私たちは「日本語教育スタンダードの構築をめざす国際ラウンドテーブル」を開催することにしました。昨年5月に第1

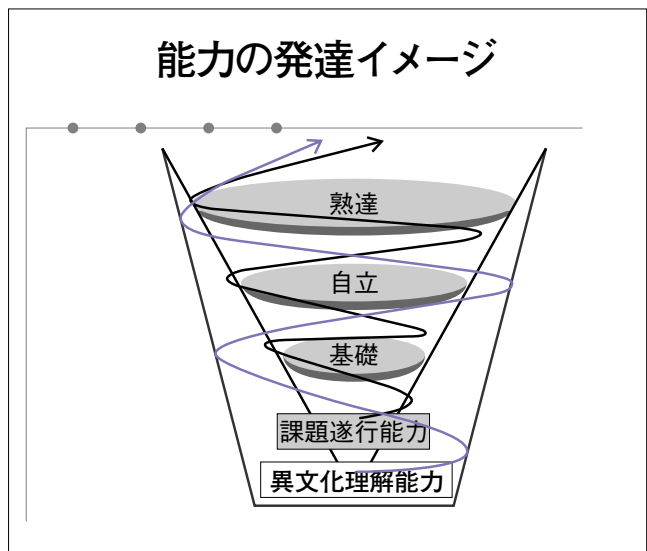


第1回ラウンドテーブル（限定公開）では、各国の言語政策の紹介を中心に2日間の討議が行われました。（2005年5月14～15日）

回を、続いて11月に第2回を開催し、去る3月25日に、それまでの議論や検討の成果を紹介することができたのです。むしろ、それは「完成品」ではなく、いわば「試作品」でした。第1回の議論の中で、「スタンダード」は（状況がつねに変化することを考えれば）「完成品」ではなく、その「過程」において有効に機能すればよいものである、という重要な指摘がありました。私たちののはじめての「試作品」は、まだその「過程」の半分にも達してはいないのです。そのほかにも、「スタンダード」作りには、次のような視点や姿勢が重要であることも分かり、これらが、私たちの「スタンダード」作りの基本となりました。

- 総合的であること
- 開放性があること
- 柔軟であること
- 創造的であること
- ネットワーキングのためであること
- 強制すべきものではないこと
- (完成品ではなく、過程であること)

また、上に紹介した取組みにはそれぞれの特長がありますが、とりわけ学習過程と到達目標との具体的な結びつきを明示した「ヨーロッパ言語教育共通参照枠組み (CEF)」が私たちの一つの目安となったのは、次のような理由があります。それは、CEFがいままでの「級」や学習時間数を基準に学習過程と目標



「課題遂行能力」と「異文化理解能力」とは、相互に関連するものです。上図は、学習過程の進度に応じた二つの能力の発達をイメージした一例です。（第3回ラウンドテーブル発表スライドより）

を設定し、その評価を行うのではなく、コミュニケーション能力重視の考え方から、学習の成果として「…ができる」という標準を、4つの「技能」と3つの「発達段階」の組合せによって、具体的に整理しているからです。いわゆる“Can-Do-Statement (CDS)”の導入です。実は、いま改定が検討されている「日本語能力試験」においても、やはりこのCDSが一つの基準になっています。私たちはこれまでの3回のラウンドテーブルを通じて、「日本語教育スタンダード」の一つの方向性を見出しました。それは、国際文化交流の一環としての言語コミュニケーションの重要性に着目した「相互理解のための日本語」という考え方で、しかもCEFやCDSを参考に、異文化・異言語間コミュニケーションにおいて重視される「課題遂行能力 (Competence in accomplishing tasks)」と「異文化理解能力 (Competence in international understanding)」の結びつきから、検討をはじめようということです。

最後になりましたが、この「日本語教育スタンダード」はまだ仮の名称であることを予めお断りしておきます。これから数年の検討や研究を経て、やがて一人前になったときに、改めてその「本名」と姿をみなさんにご紹介したいと思います。